

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十六年四月二十八日逓信省特別掛承認第三五二號
昭和二十六年二月廿五日印刷

第十七卷 第三號

浄土

三月號

椿の花咲く 吉田絃二郎

最後の遊行 大野法道

信ずるこゝろ 竹中信常

同登彼岸 藤吉慈海

1951

3

物を愛する

古來、名人と呼ばれる人は自らの作品をこよなく愛する。己れの作つた人形に懸想してこれを愛慕した人形師もあつた。

米は、その字の形の示めす如く、八十八回も人の手をくぐつて、始めて米となるのだといわれる。道端のつまらぬ雜草の花も、それが可憐な花として咲き出でるその底には、宇宙全體の凡ゆる力が作用しているのであると、アメリカのすぐれた哲學者ホワイトヘッドはいつている。一粒の米、一莖の草にも大宇宙の生命が宿つてゐる。これを知り、これを悟れば、どうして物を粗末にすることが出來よう。そしてまた、どうして物を粗末に作ることが出來よう。

いずれは他人の用に供するためにと、なりわいとして作る物に對しても、眞實の人は心をこめてこれを作る。昔のものはよかつたとよくいわれるのも、今の職人と昔の職人との心の持ち方のちがいの故である。機械を通じて大量に生産され、作品の何處にも、自分の作意の現わし得ぬような、現在の商品製造の過程に於いても、これにつらなる各人が、すべて眞實に物を愛し、物を生かそうと心掛ければ、その心は必らずやその物全體に生きて來て、使つて心持よく、用いて好ましいものともなるであらう。物を愛し、物を生かす心、これこそが、人間社會の豊かに安らかにする要諦であらう。

私共の世界には余りに物が多くありすぎる。作るに心せず、用いるに介せざる程である。三衣一鉢の簡素は許るされぬにしても、もう少し物を愛して行くならば、私共の生活は輕るやかに、そして楽しいものになるにちがいない。(竹中)

目次

同 登 彼 岸	藤 吉 慈 海(8)
塔 婆	前 田 龍 海(11)
大 梵 鐘 の 鑄 造	佐 藤 賢 順(15)
念 佛 の こゝろ	根 本 曾 代(12)
椿 の 花 咲 く	吉 田 絃 二 郎(1)
最 後 の 遊 行	大 野 法 道(5)
河 童 と 狸	三 喜 あ き ら(18)
愛 情 の 旋 風	(12)
會 友 俳 句	(10)
信 ず る こゝろ	竹 中 信 常(22)
芝 園 だ よ り	



椿の花咲く

吉田 絃二郎

庭のつくばひの傍に白いわびすけの花が咲いてゐる。

わびすけはちよつと白椿に似てゐるが、よく見ると少しばかり紅い色がかゝつてゐる。十一月の末から咲きはじめて翌年の三四月まで花を持つてゐる。寂びに可憐さを加味した花で、茶人などの好みさうな花である。わたくしは秋が来る毎にわびすけの花を待ち、春が来ればやがてわびすけの散る日を悲しむ。

わびすけが咲きはじめるころになれば初霜が降り、鶉が飛んで来る。鶉はわびすけの花芯に嘴を突きこんで花の蜜を吸ふ。そのはずみに花を散らしてしまふ。三月ころになると朝毎に鶉につゝかれて散つたわびすけの花片は黒い庭の面を埋めて落花狼藉のありさまを呈する。

庭のわびすけが咲くころになれば遠く和歌山に歸つて行つた一人の友人を思ふ。かれが故郷の和歌山へ歸つた

日、わたくしの庭のわびすけが初めて咲いたことを思ひ出すからである。

かれはわたくしたちの仲間でもなかなかの秀才であつた。東京の學校を卒へてから、京都の學校の英語の教師にやとはれ、そこで三十年ばかりを過ごしたが、かれは授業に出るたんびに、あの重いウェブスターの大英辭典を携へて教室へはひつて行つた。かれは眞正直で、ごまかしがでなかつた。

かれは京都にゐる間に明恵上人に傾倒して、ひたすら上人の研究に没頭し、つひに「明恵上人傳」を完成した。わたくしはかれの著に依つて、はじめて明恵上人について知るところが多かつた。かれは或る朝の上人について、次のやうな話を書いてゐる。

お弟子たちは或る朝、上人を喜ばすために、上人に奉

る味噌汁のなかに、特に美味を加へて置いた。上人は一口吸うてから、それと氣付き、壁の土を椀の中に入れて召し上がった。

かの友人を思ふごとに明恵上人を懷ひ、味噌汁の話を、想ひ出す。

かれは京都の學校も辭し、一生孤獨の境涯を守り通してゐるが、戰火に禍され、わづかにいさゝかの原稿勞働に依つて清貧の晩年を送つてゐる。世に名も求めず、功も追はず、かれはいつも世間の下づみに満足して生きてゐる。いかなる窮乏の底に在つてもかれの面貌からは幸福さうな明るさが消されたことはない。かれは冬を通して一枚の羽織の着替へさへ持ち合はさなかつたといふことであつた。それにもかゝはらず、かれはいつも楽しさうな微笑を泛かべてゐた。

かれのこのやうな悟りは何處から生まれたものであらう？ 或ひは明恵上人あたりの感化もあつたであらう。わたくしには、かれ自身がすでに明恵上人の生き方に生きてゐるやうな氣がする。

わたくしはかつて庭に一本の白椿を植ゑたいと思つたことがあつた。幸ひ、隣りの村に住んでゐた先輩が、近

所の農家によい白椿があるからといふので、連れ立つて白椿を見に行つた。とてもすばらしい白椿だつたので、をりを見て買ふことにして、離房の佛間の前に植ゑようなどと妻とも相談してゐたが、間もなくわたくしの妻が死に、その先輩も亡くなつたので、白椿の話はそのまゝになつてしまつた。

その先輩は軍縮のため、大尉で陸軍をやめ、辯護士を開業してゐたが、或る時わたくしの著作権が侵された時交渉を頼んだので、いさゝか謝禮を包んで持つて行つたところ「こんなものはいたゞけない」と突き返しに持つて來た。そして強ひてすゝめたところ「それではこれだけいたゞく」といひ、わづか五十圓だけを受け取つて、さつさと歸つて行つた。袴を着け下駄を穿き、老書生然と内肩を怒らせた姿が今も彷彿としてゐる。かれは昔の禪僧のやうな人であつた。

はじめて鹿ヶ谷の法然院に詣でたのは靜かな京の雨のそぼ降る日であつた。

やゝ薄暗い御本堂の中には蠟燭の火がまたたいいてゐた。黒くびかびかと光るほどに、幾百年の間拭き淨められた板の間には二十五菩薩にさゝぐる椿の花が供へられ

であつた。椿は三輪づゝを一かたまりにして、二十五群をシムメトリカルに列べられてあつた。絢爛艷麗をきはめた椿の豪華さは巴里のオペラの舞臺に立つ椿姫を聯想させた。

しかも、こゝの薄暗い御本堂では千年の祕佛の寂然たる御像一體、るゝとしてゆらめくたゞ一本の御燈の前にその絢爛と豪華とがさゝげられてゐる。そしてこゝでは一切の艷麗さも豪華さも、何の不自然さもなく諸行無常の靜觀の裡に溶けこんでしまふ。まことに東洋的なものゝよさであり、東洋的なものゝあはれのよさである。

京都では仁和寺で見た椿の繪を今もなほ忘れ得ない。

房州の富浦に和田博士を訪ねたのは四月花のさかりのころであつた。博士邸に一泊して、夜つびて枕頭に波の音を聴きながら、朝になつて、靜かな座敷で飛鳥あたりの佛を偲ばせる作風の佛さまを拜ましていたゞいたことがあつた。聴けば佐藤賢順師が開眼されたといふことであつた。まことに結構な佛さまで香を焚いて心ゆくまで拜んだことであつた。その時佛さまに供へてあつた一輪の白椿の花が、その楚々たる佛さまのお姿に映つてとても幽玄なものを感じさせた。わたくしは今でもなほ白い

椿を見ると、ふと、あの朝の佛さまを思ひ出すことがある。

川尻清潭先生は歌舞伎界の大先輩である。先生は二十年来、いつも春毎に煉香「梅が香」を贈つて下さる。

今日もわたくしは先生にいたゞいた「梅が香」を焚いて、しばし幽玄な冥想境に誘はれる思ひをした。しかもわたくしは臉の裏の溫くほてるのを感じた。

春毎に煉香を贈るやうなゆかしい心がけを身につけた人といふものも、これから後の代には見られなくなるのではあるまいか。

先生から、わたくしはかつてその御祕藏の、洪川禪師の如意をいたゞいたことがある。最も華やかな歌舞伎の雰圍氣につゝまれた先生と洪川禪師の如意と結びつけて考へるとさまさまの思ひが泛かんで来る。

先生はたまたまわたくしの家を訪ねて下さることがあれば、かならず先づ佛間に入つて香を拈して、十餘年前に亡くなつたわたくしの妻の前に合掌して下さる。先生は歌舞伎の心と佛門の心を一つに結びつけた方だと思ふ。

わたくしは去年の春の芝居に中村勘三郎の襲名披露の

狂言として「上覽猿若舞」を書いた時、感じたことであつたが、寛文元年中村勘三郎が江戸猿若座に下り「業平河内通ひ」を上演して、大當りを取り二年間打ち續けた。その時の名女方は玉川千之丞であつた。ところでこの千之丞が後に世を捨て、佛門に入つてゐる。それだけでも考へさせられるところがあるに、それと前後してさらに一人の名女方が華やかな舞臺を棄て、桑門に入つてゐる。

歌舞伎と佛門といふやうなことを、漠然とではあるが、考へさせられる。

熊谷蓮生坊のやうな人も考へやうによつては、華やかな舞臺から山門に入つた名優と靈犀相通するものがある。

芝居をやつてゐる人たちは一切を投げ捨て、かゝつてゐる。「全か然らずんば無」の心である。佛門の心もそれである。この點が二つの世界を結び付けるのであらう。今朝初めて庭の紅梅が咲いた。婢たちに交つてわたくしも、手を拍つてよろこびの聲をあげた。こゝにも芝居どころと佛門の心のつながりがある。

生きる喜び

棚の上に牡丹餅をのつけないで、棚から牡丹餅の落ちてくるのを待つて、落ちて來ないと不平を云ふものは馬鹿なのは誰も知つてゐるが、生きる喜びを得る生き方をしないで、生きる喜びを味へないと不平を云ふものは存外多いのである。

しかしどんな生活をして、どんなまちがつた生活をして、生きる喜びが與へられていたら、人間はデタラメになる。他人を殺しても、苦しめても、悪いことをしても、自分の身體や生命を粗末にしても、他人の肉體や生命を粗末にしても、それでも生きる喜びが感じられたら、人間はよくなりようもなく、よくなる必要もないのだ。

眞に生きる喜びを味はひたいとならば、自分の生命を愛すると同時に、他人の生命を愛しなければならぬ。

そこで愛が貴いものになる。生きる喜びは愛の喜びとも云へる。しかしその愛は自分と他人の生命をより完全に近づけるものでなければならぬ。そこで眞理が大事なことになる、盲目的な愛、センチメンタルな愛が、まちがつた結果を生みやすくなる。たゞ愛すればいいのではない。愛すること、自他の人格を高めることが必要になる。そしてそれは同時に全體の生命に役立つことでなければならぬ。

最後の遊行（一）

文學博士 大野 法 道

大野先生は去る二月十二日・十四日の兩日NHK佛教放送の時間に、涅槃會（二月十五日）に因んで放送されましたが特別に願ひしてその放送原稿を頂戴できましたことを、ここに喜びたい存じます何卒御味讀下さい。（編集部）

規則なき教團

釋尊は三十五歳で證りを開かれてから、その喜びを人々に遍く分けるために、各地を歩いて休むことなく、八十歳という長壽の生涯を全うして、此世を終られたのであります。其人格に歸依する出家の弟子や、在家の人達が段々多くなつて、その教團は大分大きくなりました。それでも釋尊は、弟子たちが守るべき細かい規則の「律」といふ物を設けることをせられなかつたので、各自が思ひ／＼の事をやつて居つて、どうも統一がなかつたのであります。そこで、教團が若し此儘であれば、益々不統

一になつて、中には我儘な者も出て、困る事になりはしないか、という心配が、前々から弟子達の間にあつた。

それで晩年、釋尊が病氣になられた時に、阿難という弟子——、釋尊の從兄弟に當る青年で、始終、釋尊の身のまわりのお世話をしていたのですが、——此阿難が、御存命中にせひとも、教團の人々の守るべき規則を、きめて下さるように御願ひいたしました。所が釋尊は、「いや、そういう規則は設けたくない。規則というものは、教團に於て、大勢の弟子をもつてゐるのは自分であるとか、又我れは大衆を統率する者也というような、考てを持つてゐる者が設ける物である。私にはそうした考えは全くないから、規則のような物を設けようとは思わない」と言つて、律の規則を設けられなかつたのであります。が、釋尊は、それを斷わるといふものに引續いて、律の規則

よりも、もつと基礎的な、人々が生きるために力となるものを、説かれたのであります。

二灯の訓え

それは、「二灯の訓え」であります。「自ら灯となり、法を灯とせよ。我れ亡き後に、之を實行する者は、眞に我が道を知るものである」というのが、その訓えの言葉として得えられて居ります。自己の灯、法の灯、二つあるから二灯であります。之は「眞に我が道をゆくものである」とあるように、佛の道の軌準ともいうべきものであります。

初めの「自ら灯となる」というのは、何でも直接に自分でやること、自主敢爲の精神であります。自分では何もせずに放つておいたり、空しく他に期待していたりしたのでは、終いには行詰るという事であります。

次ぎに「法を灯とする」というのは、無理をしないこと、素直に進むことであります。従つて、「二灯」は、事をすれば、したゞけの事はあるという自信をもつて生きることであります。

こゝで一寸御注意申したいのは、始めの自灯について之を「自らを灯とする」と解して、之は何でも自己以外のものゝ世話にはならぬ、たよりになるのは自分の力だとすると、それは此場合には間違いとなります。そうし

た偏狭な片寄つた自己が、灯であろう筈はないからであり、無理をしないという、法の灯に一致せぬからであります。已上が「二灯の訓え」のこゝろであります。

大なる母心

教團の人々の守るべき規則を設けることを請われたのに對して、こうした基本的な訓えを説かれた、釋尊の心持ちを味わつてみますと、生きる力になるものは何かという事について、弟子達は、教主の定める權威ある規則だと考えましたが、釋尊は反つて、本當の力は人々各自の自己にある。外から來るものではない。又規則というものを當てがつたのでは、それは一つの型に、人々の生活を箝め込むことになるので、無理である。それよりも人々各自が具えてゐる功德に自信をもつて、それが自由に日々の生活に映り出る事が大切だとされたのであります。そういう譯で、釋尊は遂に律の規則を設けずに、此世を去られました。大體釋尊滅後三百年頃に、長老達の申合わせによつて、初めて佛教に律というものが出来ましたが、律の規則を貫くものは、此「二灯の訓え」の精神であります。

それはともかくとして、弟子達は、釋尊を人間から遠く離れた、想像も及ばぬ程エライ御方と見て、そこに力を感じたのでありますが、釋尊自身は、どこまでも人間

を離れず、人々と俱にある喜びの心で一パイであつたのであります。前に申しました通り、自分は弟子達を統率する者であるというような、人々から離れた處に自分を置こうとはせられず、どうしても人々から離れることができなかったものであります。日に／＼健やかに、育つてゆく幼児を見る程、うれしいことのない母親の心は、絶對に子供から離れることがないように、人々が自ら灯と

——ラジオ放送のおしらせ

佛教の時間 (毎週月・水・金曜午前六・四五—七・〇〇、第二放送)

三月

十四日 對談 佛教と現代知性 大正大學々長 眞野正順
十六日 東大助教授 武藤義一

十九日 彼岸隨想 増上寺法主 椎尾辨匡

二十一日(BK) 彼岸會法要 奈良東大寺大佛殿から

二十三日(BK) 僧 房 行 脚 高野山座主 和田性海

二十八日 佛教人生案内(5)

三十日 (6)

四月

二日 聖 德 太子 龜井勝一郎

四日 佛教青年會

發會式實況(錄音) 築地本願寺から

六日 これからの宗教法人 文部省 宗務課長 篠原義雄

なり、法を灯として、健やかに生きてゆくを見る程、嬉しいことのない、釋導であつたからであります。さればこそ、「たとえ私は入滅しても、二つの灯をもつ人々は眞に私の道を知るものである」と結ばれたのであります。之は人々が、二灯によつて、健やかに生きる確かさを、充分に見届けられた言葉だと思ひます。(つづく)

九日

ラジオ花まつり

話 里見達雄

(聖句朗讀、合唱、話) 合唱 サ—ラ合唱團

花まつり子供會

十一日

新佛教講話

増谷文雄

十三日

釋尊の生涯

十六日 十八日(BK) 名利巡禮「花の醍醐寺」

妙好人の話

柳 宗悦

二十日

佛教徒の聲

二十三日

佛教人生案内(7)

二十五日

(8)

二十七日

三十日

同 登 彼 岸

藤 吉 慈 海

船は舟山列島の間をぬつて東へ向つて走つてゐました。寧波を出てからもう一時間以上もたつてゐます。乗り合はせた中國人の學生が一人私のそばへやつて來ました。彼は見たところ二十二三歳でせうか。人なつこさな顔をして私に話しかけました。

「君は日本人ですか。どこへ行くのです。」

と流暢な英語です。私も片ことの英語で、

「普陀山へ行きます。」

と答へました。それから二人はデツキの上で、てすりにもたれ乍ら色々と語り合ひました。

彼は上海で化學の勉強をしてゐる學生でした。この暑中休暇に普陀山へ海水浴にゆくのださうです。それはたしか民國二十三年の夏私が高等學校の三年のときでした。倉本書記生失蹤事件直後で、蔣介石の新生活運動が徹底してゐる浙江・江蘇の地方は反つて一時的に治安もよくなつてゐましたので、私は佐賀高等學校の岩本秀餘先生と共に上海から南京、蘇州、杭州、寧波と江南の佛蹟巡禮の旅に

出かけました。當時、佐賀高等學校の佛教青年會では岩本教授を中心として道元禪師の「正法眼藏」を勉強してゐましたので、若き日の道元が孤舟に乗じて支那に渡り、天童山の如淨禪師について正しい佛教を學究行取せられたお氣持に感激して、われわれも一つ天童山へお詣りしようではないかと言ひ出したのがこの巡禮の動機でした。

長崎から上海へ。そして蘇州、杭州、南京を見學した一行六名の中には、最近新聞紙上ににぎわした共產黨員春日正一氏を、名古屋の私宅にかくまつてゐた山口正之君もまじつてゐました。彼はその當時佐賀の一年で秀才の譽れ高い人でした。杭州で山口君等と別れて私は岩本教授と二人で一人通譯をつれて寧波へゆき、それから龍に乗つたりして天童山や雪竇山、阿育王寺を巡り、江南の佛教の盛大なるに驚きました。そして最後に寧波から船に乗つて觀音の靈場普陀山へお詣りに行つたのでした。

治安は、いいといつても海岸の丘の上には海賊をふせぐ大砲が砲

口をのぞかせ、私共の乗つた船にも海賊よけの鐵條網や機關銃が備へつけてありました。私達二人にはピストルを持つた護衛と稱する警官がつきまとい、むしろ氣味悪くすら感じました。船が定海より普陀山へ近づいた頃、その中國の學生さんは、

「君は蔣介石の排日政策をどう思ふか。」

「君は日本の帝國主義的侵略政策をどう思ふか」

と仲々しつこく問ひかけて來ますので、私はあたらずさはらずの返事をしてゐました。しかしその質問のしかたから彼等の受けてゐる排日教育が餘程徹底したものであることを知りました。でも個人的にこの學生さんから受ける感じはとてもいいので、私は宗教や學問のことに話題をかへました。するとこの化學專攻の學生は佛教のこともよく知つてゐて、彼の語るところによると普陀山は觀音様の御靈場で日本の惠蔭えいんといふお坊さんの開基ださうです。あとで調べてみると彼の言つた通り唐の宣宗皇帝の頃、日本から支那に留學してゐた惠蔭といふお坊さんが五台山で觀音像を戴き、それを持つて日本へ歸らうと船に乗りましたが、船がこの普陀山まで來ると、どうしたのか動かなくなつてしまひました。そこで惠蔭上人は船から下りて、五台山で頂いて來た觀音様に一心に祈願しました。すると不思議に船が動き出しましたので上人はそのままこの島に止つて庵を結び觀音様をおまつりしたといはれてゐる。これがこの普陀落山のおこりで今は全島に澤山のお寺やほこらがあり、巡禮のお客は遠く北支方面からも來る程の盛觀です。

私は色々と佛教のことや信仰のことについて、この若い中國の學

生さんと語りました。そして彼は別れる時に、私の差出した畫帳に、

「同登彼岸」

と書いてくれました。

それで「彼岸」とはどんな意味かとたづねますと、彼は

「彼岸とは向ふ岸といふことで、佛教では到彼岸ともいふ。今君と僕と一緒に觀音山の御靈場にお詣り出來るから「同じく彼岸に登らん」と書いたのだ。」

と申しました。そこで私も

「われわれは同文同種の民族だから、お互に仲よくしよう。特に同じ佛様の教を信ずる者は互に手をとり合つて彼の岸まで行かうではないか。君と同じ船に乗り合はせて觀音様にお詣りすることが出来るのは大變嬉しいが、われわれは同時に心の彼岸にも到達しなければならぬ。」

と申しますと、彼もニコリ笑つて大きくなすきました。

私はお彼岸が近づくと、この中國の學生さんのことを思出し、彼が書いてくれた「同じく彼岸に登らん。」といふ語を思ひます。彼は今どうしてゐるでせうか。彼もまた幾度かの戦争で遂に戦死したかも知れません。あの頃私どもは

チャンコロと言へば鬼子アイヌといひかへす支那と日本よ手をつなぐ日なきか。

と歎いたのですが、とうとう戦争となり、日本は戦に破れ、戦に勝つた中國もまた中共軍の占領するところとなつてしまひました。中

國のお寺や佛教徒達は一體どうしてゐることです。そして又お隣の三千萬の朝鮮の人達は一體どうなることですか。そのことを思ふと全くお氣の毒でなりません。

日本もまだ占領下にありますが講和の曙光がやつとみえてまいりました。ああ然し平和はまた攪亂されようとしてゐます。私たち佛教徒はこの時こそ佛様の慈悲心をもつて、世界の平和と人類の福祉とに貢献しなければなりません。佛教に説く彼岸の世界とは本當に平和な世界で、それは眞實の自分にめざめた人々が、人種・國家・貧富の別なくみな同胞として互に手を取り合ひ、あはれみ深い心をもつてお互に慰めはげまし合つてゆくところである。そして正直な者が幸福になり、一生懸命に働く者が幸せを得る徳と福との完全に一致する世界です。そんな世界を私たちはつくらなければなりません。そのためには皆が心を合せて佛様の教を守り、本當に正しい生活をしなければなりません。お彼岸の一週間はそのために修養をする最もよい時です。

「あらざ」の齋藤茂吉先生は

あかあかと一本の道とほりたり

たまきはるわがいのちなりけり

と歌つてゐます。私たちは生活につかれ、欲望にまけて仲々正しい生活を續けることが出来ませんが、つまづき乍らも心に信仰の火を點じて彼岸の世界まであかあかと一本の道をひたすらに歩きませう。この道は、中國の善導さまも日本の法然さまも熊谷蓮生坊も源智上人も、そして私たちの御先祖の方々も皆歩いてゆかれた道です。

そのあしあとには春の美しい花が咲いてゐます。恩讎を越えたお念佛の白道には花も咲きませう。

どうか私たちの歩くあしあとにも美しい花が咲き亂れるやうにありたいものです。

會友投句

福島 野内 英光

たんぽぽが子等に摘まれて彼岸入り

みほとけに供えて今朝は春彼岸

法幢に風なびかせて花の頃

菰とけば物言ひたげに牡丹の芽

小高 舒明

僧にまた阿彌陀の慈悲や寝正月

おみくじや善男善女、花の寺

かく然として落椿地に印す

人死んで一基の墓標となり、塔婆となる。それは單に、なきがらここにありといふマークか、それとも拜む對象と考へたものか。埋つばなしも妙だといふので立てたのが感情的な一つの動機かもしれない。死後の存在をなるべく永遠に示してやりたいといふ人の美しい望み、死者への禮儀として、大は長年の年月と多大の人力を費したエジプトのピラミッド、古代帝王の古墳から、小は明日の存在を危ぶまれる土まんじゆ

うに至るまで、その心は同じである。佛教の

塔婆、塔も、もとく

釋尊の亡き後、佛骨を

祭り、佛永へに今も在

しますとして拜み、魂

の依り所としたのであ

つたが、後世發達變化

して五重の塔となり五

輪となり、又、今普通

塔婆といはれるものにもなつた。

年回法要の時に、故人の追善のしるしとして、塔婆を立てるのは床しいしきたりである。石碑の後、立並ぶ白木の塔婆を縫ふて香煙がゆらぎ散じてゆくのを眺めながら誦經に心を和して亡き人を祈るしばしは、莊嚴であり、生と死の中有なる世界をみるやうな趣が感ぜられる。煩惱を停止して寂として聲なきものゝ息吹がしみくと

塔 婆

前 田
龍 海

頭を垂れるものゝ心に、そこはかたなく通ふ。

ふと靜かに塔婆を眺めると、その單なるマークを超へ、シムボルとして表はす意味の嚴肅さに襟を直さずにはおられない。上部から圓子形、半月、三角、圓、正方形(下につづいて實際は長方形)の順に形が切られ、順次に人間の頭、首、胸、胴、下半身をかたどり示す。その各形の上に梵字でクハ、ハ、ラ、ダ、アの字(ふつうキヤ、カ、ラ、バ、アとなまつて云ふ)が讀みとれるが、これは空、風、火、水、地を意味する。佛教では世界は、この五原素即ち五大に歸一される。人間もそうである。といふことは、形式は粗朴な實在論であるが、意味は人もすべての、もろくの要表に還元せらるべきであり、もろくの縁に待つてあるべきものであり、自我を固執すべきものなく、全一、絶對の大なる秩序の世界、法界の一分としてある。而して、今この改名基は生を終へ、死せりといふより、その世界の中に固性を没して歸一したといふべきである。であるから、塔婆の背面には長々とバンといふ梵字が認めてある。これは大日如來を示す種字しゅじといふ象徴的文字である。大日如來は法身として拜まれ、世界の根本原理そのものである。上述の法界の主である。五大よりなるこの身は、この法身に攝取せられ歸つていく。いひかへれば、死者ばかりか、今五大より成り生きる私共も、裏返へせば法界に連らなるもの否法界それである。バンの代りに入一法句と書くのも南無阿彌陀佛に收めとられるといふのである。我心身は、このやうに、佛のむねの裡にあり、個のみでなく全てと生きる喜びを知る人の心身の表裏を説いて、塔婆は寂然として風に聲を發する。



念佛のこころ

根本曾代

こゝ二三年、誘われるまゝに、熱海の知人の家で、新年を迎えることにしている。東京の、骨を刺す寒さから逃れて来ると、思わず、救われたように、ほつとする。梅一輪づゝの暖かさというが、こゝでは、いつの間にか、冬を素通りして、暦は、寒の入り知らせているのに、梅も櫻も、チラホラ綻び初めし、眞紅の椿や、たわゝに實つた蜜柑が、眩しい海光を浴びている。

東窓を開けると、眼前に、大島や、初島が繪のように浮び、錦ヶ浦や伊東の曲浦長汀が夢のように横わつて、夜ともなれば、乙女の瞳のような灯が、チラチラとまたゝいて、ほのかな郷愁を點してくれる。

夜が白々と明けると、東の空をばら色に染め、金色の日輪が、無數の光の矢を、強烈に放射しながら、するすると、水平線を離れて昇天して行く。黄塵に濁つた東京の太陽にくらべると、余りの壯麗さに、たゞ打たれて、無心に合掌せずにはいられない。

ところが、毎日見慣れて来ると、この感激も次第に薄れて行く。人間は、とかく、ふんだんに得られる自然の恩澤を、輕視し勝ちなものである。英國詩人、リチャード・ル・ギヤリアンが、"もし大自然が、不用意に月を無料の見世物にしていなかつたら、人は月の出を見るのに、萬金を惜しまないのに"と言つてゐる。又、"一錢も金がかゝらないため

愛情の旋風

一つの宗門により繁榮し、それに依存する街——桑門の街——そうしたタイトルが、巨大な山門、その高い石段を上り下りする參詣の善男善女の群を背景に、まづ映し出される。珍らしく佛教の世界を舞台にとつた映畫だ、というので、これまた珍らしく私は觀に行つた。中村八郎の「桑門の街」が原作だというのが、私は原作は讀んでいない。しかし、そこらの安手な戦後文學めいた「愛情の旋風」などという名前より、原作の方が内容的にはよつほど佳いにちがいないと、その題名からもまづ感じられたが。

長い大陸生活から歸つて來た松山祐天(佐野周二)を酒にゆかせた傷心は何であつたか。かつての戀人(花柳小菊)は應召中に亡兄に嫁し、彼は法灯を繼ぐ立場、そして、この既に亡兄の妻となつたかつての愛人を妻とする立場におかれる。足繁く通ふこの街の酒場の女給(折原啓子)と親しくはなるが、彼の冷たい仕打にあつても彼の心にまつわる妻の悲愛が一方にある。酒場の街の愚連隊の出入にま

に、多くの幸福が看過されている」という諺がある。

實際、この無償の、神秘的な天恵に對して、私達は感謝の心を忘れてゐる。眞理の象徴である、この大らかな慈光を、有難く、素直に受け入れる、心のゆとりを持つことは、荒んだ今の世に、平和な信仰の芽生えを培う前提であると思う。

優しい、暖い日光は、いつもにこにこと、貧しい家の窓にも、豪奢なベランダにも、平等に訪れる、天來の無代の醫者なのである。あの恐ろしい結核菌でさえ、直射日光には、數時間で死滅するという。物質萬能の世の中は、高價な藥や、有名な醫者に過度の信頼をおくものであるが、病氣になつてからでは、既に遅いのである。

じつと、手を合せて、日の出を拜んでみると、ひとすじの光が、私の體の中にも透み通つて來て、今日一日の活動力を與えられた、明るい心がみなぎる。そして、いつかみ佛と歸一する、なむあみだぶつのお念佛を唱え、安らかに慈悲のみ手に抱かれている法悦を感じる。言つてみれば、この法悦は、宇宙の神秘や、眞理につづくものであると思う。法然上人が「たゞひとすじに念佛せよ」と、説かれた、あの尊い一枚起請文の哲理が、おぼろげながら感得される。

當時、上人は、知識程度の低い民衆を、本來の姿のまま、淨土へ導くために、心を空しく、一心に唱名する、他力本願のみ教を開かれたのである。人を見て法を説かれたのである。單純な、その頃の人は、それで魂の安住の地を見出して、隨喜の涙を流した。

文明の尖端を行く、原子力の發明も、つまりは、宇宙の神秘の、ごく微小な、一つの鮮明に過ぎない。ところが、皮肉にも文明の進歩は、ますます人間の幸福と逆行して行く。精魂を傾けた發明を、平和招來のために善用せずに、地球上に平等に生存權を享有している人間同志を、大量に抹殺し合う兵器とするに至つては、どう考えても眞理の埒外である。

きこまれ、遂に本山から地方の一寒村の小寺に轉住を命じられる。妻の愛情、身を引く酒場女の義理立ての中で祐天は甦つてゆく。まことに異色作などという文字に縁遠いものである。

僧籍にありながら、こうした生身身の感性を容易にぶつきれぬため苦惱する青年僧の姿は、そこには片鱗も描かれていない。傳統の枠の中で苦惱する若き佛教者の姿を、そこに見出そうとしても無理である。この映畫が描いている程度のことなら、何も敢て僧門に世界をとらなくとも、充分である。日常の社會には一杯にもつと深刻に同じ系列の問題は起つてゐる。

歸還した人々の苦惱——歸らぬ夫を待つた妻の問題、之等の人たちをしばりつける「家」こうした禍は、どの町にも村にも少なからず起つてきている。そして多くの人たちが、それぞれに悩み苦しみ、血を流し息をのむ想ひで各々の解決を見出して來たのである。しかも問題がもうなくなつたのではない。ラヂオの尋ね人の時間がつゞいてゐる様に、まだまだ人々は苦しみ、涙を流している。それだけ

しかし、悲しいことであるが、闘争性というものは、大なり、小なり、しよせん、宿命的人間性で、人間の生存する限り、不即不離の輪廻のように思われてならない。

熱海といつても、私の宿は、一つ丘陵を越えた伊豆山の濱邊にあるので、海沿いの國道を、ぶらぶら散歩がてら、そのむかし、頼朝が発見したという、走湯温泉へ浴みに行く。全く、走り湯という名に背かない、豊富な源泉は、波打際に近い崖に、何百年もの間、こんこんと湧きつゞけている。

伊豆一帯は、頼朝の史蹟が到る所に散在しているが、その頃、伊豆山は、走湯山の名で弘法大師の開創の僧堂伽藍が、夥しく建立されていて頼朝が旗擧げをした時に、政子母子が身を潜めたのも、その中の一字であり、法然上人に深く歸依した熊谷直實が、無常を觀じて得度をしたのも、一山の専光房という寺院であつたことが、東鑑に見えている。

今は、在りし昔の面影はなく、たゞ般若堂のみが、ぼつねんと山の中腹に残り、その西側に、町の人達の祖先が靜に眠る、奥津城がある。あたりは、一面に耕された段々畠で、その中に、點在している家々の庭には、きまつて豊かに稔つた蜜柑の木があつて、如何にも、平和な光を湛えている。

ふと、耳を澄ますと、この道にも、あの木の蔭にも、幾百年前の、軍兵の足音や、鐔鳴りや、軍馬のいなゝきが潜んでいる錯覺に、はつと驚くと、それは、今もむかしに變ることない、波の音であつた。日本も、むかしは日本人同志で戦争をして來た民族であつたことが深く身にしみる。

謙虛に、一心にお念佛を唱えている、靜な境地を求める心が、年毎に深まつて行く。

ではない。そうした苦しみ、そうした涙に、冷酷に生活の問題が押ししかぶさつてゐるのが、現実なのである。

この映畫の主人公、祐天の立場の如き現実をふりかえれば敢て特異のものではない。若し異色をここに言うべきなら、彼がそのような苦惱の立場を、若い佛教者としてどう解決したか、という點でなければならぬ。それなのに映畫にはそれが無い。こうした苦惱を通して、彼はその寺の檀信徒に何を説いたか。彼は、佛教の教えを、その慈悲の訓えをどう受けとつたか。残念乍ら映畫には全然そんな場面はでゝこない。彼はただ、妻の愛と酒場女の義理立てに救われたようなものだ。「愛情の旋風」はお涙頂戴のほろ甘い微風であり、彼はその中で好い氣になつて我儘をしているに過ぎない。

全くがつかりさせる映畫である。現實の若い佛教者、青年僧たちは少なくとも、もつとはつきりしていることで、私は慰められる他はない。それにしても佛教の世界をとつた心に迫る映畫でも文學でも出て來ないものか。原作の方はどうなのか。誰か讀後感を書きませんか。(藤田)

大梵鐘の鑄造

順 賢 藤 佐

大梵鐘の鑄造される現場を實際に見學するなど、いうことは、全く千載一遇の好機とでも言おうか、珍らしいことである。

横濱市鶴見區矢向の良忠寺は虫封じのお寺として近隣の信仰を得ている寺であるが、浄土宗史の上からいうと、三祖記主良忠上人の開かれた寺で、恐らく良忠上人が埼玉の鴻の巣と鎌倉とを往復される途中で、しばらく滞留しておられる間に開創されたのであらうが、七百餘年に及ぶ歴史を誇っている。先頃の大戦でこの寺の梵鐘も供出の災厄に遭つて、主のない鐘樓だけが、風雨に曝されて、五年の歳月を経てきたが、住職森本祐顯僧正は、去る八月梵鐘の鑄造を發願した。次男の祐堂君が大戦中出征してソ連へ行つた

まゝ未だ歸還せず、その後たしかな消息もないので、あれやこれやを考えられて、僧正の深い志が籠められて、この發願となつたのであろう。

「發願してから四十八日間で百萬圓集めました。彌陀如來の四十八願になぞらえて、四十八日間に必ず百萬圓を募財しよう」と發願して、毎日二時間しか眠りませんでした。」

と僧正は勸募當時の熱意を語つた。

梵鐘は二百二十貫、この數字には興味深い因縁が秘められている。百八煩惱をたゞきつぷすというので百八貫、聖德太子の篤敬三寶の御精神を更に十倍して三十貫、それに僧正の年令七十二歳を記念して七十貫、合せて二百二十貫である。鶴見の平和鑄工株式會社で鑄造することに契約したが、工場でも社長初め技術陣を總動員して、この歴史的な鑄造に遺漏なきを期して、準備をすゝめていた。

題字、鐘銘も新に用意された。題字は吉田總理大臣が、「梵聲如雷震、八音暢妙響」と、一連の聖句を墨痕鮮かに書いて下さつた。民主國家として立直ろうとしている新しい日本の、首相の筆跡を梵鐘に残すというのも、歴史的な仕事である。この揮毫は鑄造の数日前になつてやつと届いた。

さき頃供出した梵鐘の鐘銘は、徳川末期の名文家として幾多の文範を残した泉谷寺恵頓が撰じたもので、恵頓の「瓦礫集」にも載つている名文であるが、こんどはそれをその

まゝ刻むわけにはいかなかったので、新しく撰文しなければならぬ。そこでその作製を加藤虎之亮博士にお願いした。

加藤博士は人も知るわが國漢文學界の老宿で、東洋大學學長を勤めた方であり、大正十五年以來いままなお引續き皇太后陛下に漢籍を御進講しておられる學者である。大正大學の吉井教授を通じて、加藤博士に撰文を依頼できたことは、まことにその人を得たわけである。これも昭和の代表的漢文として後世に残るであらう。漢文であるから今その全文をこゝに載せることができないが、その意味は、この寺は淨土宗の三祖記主良忠上人の開山で由緒ある寺であり、その梵鐘も檀徒椎橋氏の寄進になつた名鐘であつたが、この度の大戰に供出の災厄に遭つた。戦後五歳にして機縁熟し檀信から百萬金の募財を得て、梵鐘を新鑄することになつた、願くは朝に夕にこの鐘の音を聞いて迷いを覺し貪りを捨て、平和社會の建設に努められたい、というのである。

鐘銘は遠藤祖雪氏の手によつて美事に淨書されて工場へ廻された。首相の題字も鐘銘も共に浮き彫りにされるので、一字一字が型に取られて、梵鐘の原型の上へはり附けられるわけである。

こうして準備は全く整つた。工場の方では慎重に研究が進められて、音響効果についてはその道の權威理學博士小橋豐氏が直接仕事に當つていた。

秋の文化の祭典も一通り済んだ十一月六日、六日という日を選んだのは記主禪師の命日である、鶴見の平和鑄工の工場で盛大な鑄造式が営まれた。あいにくと朝から時雨れて晩秋の雨が時々冷たく頬を打つ日であつた。工場から數百メートル離れた家から、奏樂練供養で緋衣の導師と十數人の式衆が式場へ練り込んだ。工場には梵鐘の鑄型の前に祭壇が設けられて供物が供えられ、七五三繩が張られてゐる。加藤博士はじめ多數の來賓と關係者が式衆の入場を待つて居並んでゐる。清めの道場洒水に始まつて一同が鑄型の周圍を讀經と共に行道している間に、工場の一隅では熔解爐に火が入つて、ごろごろと音を立て始めた。一方は銅を鎔かし他方は錫を鎔す。銅八分三厘と錫一分七厘とが別々に鎔かされてゐる。やがて法要が終ると、そのごろごろと高鳴る火焰の響の中で、技術者の一人はマイクを通じて、この歴史的な光景の解説を始めた。錫の代りに金を入れ、ば鐘の音はよくなるけれど、これだけの金は時價にして、何千萬圓になる、などという説明。しかし擴聲器を通じてのその聲さえも、ごろごろと鳴る火の音で消されてしまふ。

銅も鎔けた。錫も鎔けた。やがて熔解爐の下部が開けられて、眞赤に鎔けた銅が、ドロドロと溝を傳つて大きなバケツのような器物の中へ入れられる。赤い液體が溝を流れ

ているのと變りはない。バケツの中へ、ときどきわら灰や、おが屑が投げ込まれる。

「あれは溶けている銅の温度が冷めないうようにするのです。」

とマイクの聲が説明する。一人の工員が長い柄杓で、一方の溶けた錫を、杓つて銅と一しよにかき交ぜる。全部を一つに交ぜてしまうと、灼熱した銅と錫を入れた大バケツは、ケーブルの装置で軽々と宙に吊され、スルスルと鑄型の方へ移動し始めた。工員の幾人かは巧みにそれを操つて、鑄型の上で少しずつバケツを傾けると、眞赤な鑄液は徐々に鑄型の中へ流れ込んでいつた。バケツが全くカラになるまで、凡そ三分位な時間であろうか。流し込みはアツ氣なく終つてしまつた。これで魔障なく鑄造は終つたのである。減多に見ることのできない鑄造の儀式であつた。

槽徒の代表としていろいろ世話している人達の顔にも軽い安堵の色が浮んで、そちこちで「おめでとう」という喜びの聲も聞えた。

鑄型の外へこぼれた鑄液が土の上に流れてまだ赤々と熱している。人々はそれで煙草の火をつけて、うまそうに喫つている。

「この火で煙草を喫うと中氣になりますよ。」

と言つて皆に勧めている人もある。面白い俗信である。

なむあみだぶつの歌

おけさ節で有名な佐渡、いまでは民謡情緒ゆたかな島を想ふが、歴史の上に遡ればこゝは島も通はぬ流刑の離れ島罪ありて、或は罪なくて、こゝに配所の月を眺めた人々は少なくはない。

冷泉大納言爲兼も、陰謀の罪に坐して鎌倉北條氏に捕えられて、こゝに幾年の流離の幽愁を抱いて過した。佐渡相川を去る東南七里、赤泊の禪長寺はその遺跡であるが、歌人爲兼はその幽閑を卅一字に託した、それらの中に、「なむあみたふつ」を五七五七七のそれぞれの頭文字に置いた歌がある。これら一連の歌、十二首は巧に構成されて、縦・横・斜と配列してそれぞれが「なむあみたふつ」を現わすのであるが、印刷の都合上、縦の配列をもつものを掲げてみる。「西への通ふ心を極樂の道のしるべと思ひ知らずや」と、彼は幽愁の中にも淨土への道を抱いて生きたのである。あさ日影みとりに霞むたにの戸にふる淡雪はつもらさりけり

あつま路のみちは物うきたひ衣ふる里思ふつまや戀しきあす知らぬ身にはいつこもたのまれずふかきみ法のつとめのみして

あき果つる身を木枯しのたまくらにふけゆく夜半のつきもすくなし

童話 河童と狸

三 喜あきら

オボロ／＼のお月様が眠そうにお出になりました。桃の花も咲きました。三月です。春が駈歩で近づいて来ています。

沼の河童もどうやら長い冬眠からさめると、又そろ／＼といったずらがしたくなりました。「あ、あ、あーあ。やれ／＼よく眠つたものだ。もうこの位眠りやあ、ちよつとや、そつと暴れたつて、くたびれることはありやしねえ。さてと、岡にあがるとするか」

そういいながら河童は、ビョイと沼の岸に這いあがりました。岸にはにこ／＼と静かな笑みをたたえた、石のお地藏さんが、一人ポツンとお立ちになつていました。

「エヘヘヘ。これは／＼お地藏さん。どうも永らく御無沙汰いたしやして……。その後、おつと、あれは去年の十五夜さんの晩でしたかね？ 狸の野郎とけんかをやらかした時には、えらくおさわがせをいたしやして。」

エヘヘヘ。ところで、狸の野郎はどうしやしたか、ごぞんじござんせんか？ あの野郎はまつたく困つた奴でしてね。まー。こんな

ていました。

すると、そこへ豆狸のボン子がオボロ／＼のお月様に浮かれて、山から遊びにやつて来ました。

「まあ、ここから見るお月様もいいわねえ。お山の上で見るのと、また違つた味があるわ。おや／＼、お地藏さん、こんばんは！ どうなの？ この頃の景氣は——ふーん。やつぱりシケてるのね。なんにもお供え物があがつてないわ。それなのにさ、お地藏さんたら、いつも笑つてばつかりいて。まあ、いいわ。あたしがあの桃の枝を折つてきてあげるわ。ちよつと待つて……。變よ、この匂？ 何かしら？ 何だか魚くさいわ。」

あつ！ これは河童だわ。河童よ！！ いやだわ、あいつ！！ なぜつて、去年のあの日……十五夜さんの晩を、今思い出しても續にさわるわ！ やつぱりお地藏さんの前で河童とあつたのよ。そんな時、なんといつたかごぞんじ？

『おい！ ボン子！！ この世の中に俺位りこうで、明朗で、おしとや

ことを石のお地藏さんにお話しても、仕方がねえですね。さてと、ボチ／＼麥畑でも荒しときやしよう。じゃあ、ちよつくらごめんなせい」

河童はとんがつた口の涎を、横手でぐいとふきとると、ヒョイ／＼と麥畑の方へいつてしまいました。後には、石のお地藏さんが、だまつて静かにさつきのままで、笑つて立つ

かで、しかもきりよう良しはなからう』だつて。

へん!! なんていう言い草! だからあたしだつて、カツとなつちやつて『なにいつてんのよ。河童の癖に。第一河童が美しいなんて聞いたことがないわ! 山に入れば、へん! あたしだつて、こう見えても狸小町といわれる程なんだから。あんまりみそこなわないでよ』つて、いいかえしてやつたの?

そしたら、河童の奴、なんていつたと思います? こうよ……。

『ブツ! お前さんがね。へー、山の奴等の目はふし穴同然さね。ボン子が狸小町だなんていつたら、この十五夜さんが西から昇るよ』だつて。

あたし、もう我慢が出来なくなつて、得意の腹つづみをポーンポーンとつづけざまに三つ打つてやつたの。そしたら、河童つたら、オホホホあわてて沼の中にドブーン! と飛び込んだじやつたのよ。そして、首だけ水から出して、目をバチクリさせているの。オホホホ。面白かつたわ。つうかいだつたわ。

ところがどうでしょう! あたしが大笑いしていたら、いつのまに岸へ上つたのか、河童の奴、あたしを田圃に突き落したのよ。

本當よ! お地藏さん。ごらんになつたでしょう? あたしの泥だらけの姿つたら……。山へ歸つたら、さんくみんなにからかわれちやつたわ。ね、本當に悪い河童でしょう!』

ボン子のおしやべりを聞いているのか、いないのか? お地藏さんはやつぱり、靜かに笑つております。オボロ／＼のお月様も、寝ぼけ眼で聞いているのか、ゆつくり／＼お空を散歩しておりました。

そこへ、麥畑を荒しまわつて來た河童が、歸つて來ました。

「エへへへへ。これは／＼ボン子嬢! いやさ狸小町様。何をわめいておいでかね?」

「あ、あら、河童の奴! シーシー。あつちへいつてよ。そばによるとくさいわ!」

「エへへへへ。そう怒りなさんな。ほれ、お地藏さんが笑つておいでだ」

「お地藏さんがなによ。昨年のこと、おぼえてるでしょう、しらばつくれても駄目よ」

「昨年のこと?」

「そうよ。あたしを田圃の中に突き落してさ。あれが男性のエチケット?」

「へー腹鼓を急に打ち出して、河童様をおどかすのが、女の方のエチケットですかい?」

「知らない! そんなことをいうと、又お腹を叩くわよ」

「エへへへへ。どうぞ／＼御遠慮なく。ゆつくり見物させていただきやしよう」

「ひとつ／＼河童のいうことは續にさわるわ。よし! いいわ。あんなの耳がつんぽになるまで、腹つづみを聞かしてあげるわ」

やにわに狸小町のボン子は、着ていたチャンチャンコをかなぐりすてると、兩方の手をお腹にあてて、いきをのみました。

お地藏さんだけは、やつぱりだまつて靜かに同じ所をながめていました。あつ! どこかの森の奥で、フクロウの子供が、「ホーホー」

となきました。

「ボーン」

最初の腹つづみが、静かな春の夜の大氣を破つて、響きました。

「よくつて？これが最後の忠告よ！いくら後になつてとめても、駄目の皮よ！叩き出したらとまらないんだから。何をかくそう、私は證^{シロコ}誠寺の狸囃子のナンバーワンだつたのよ」

「それは／＼よけい聞き甲斐のあるというもの。よーすとも。どん／＼叩き鳴らしておくなせい」

河童は元氣よく、こういいましたが、心の中では耳がつんぽになりはしないかと、とても心配でした。

「いいのね。では覺悟してちようだい！」

ボン子の腹つづみ！ あゝ、その音は……なんて、すさまじい音なのでしよう。やかましいラヂオの音楽を聞くよりも、もつと／＼うるさいのです。

河童は、よつぼど沼の中に逃げようかと思いましたが、「えーい。ここが我慢のしどころだ」と、ばかりに、腕を組んで、齒を喰いしばつて聞いていました。

あんまりうるさかつたからでしょう。オボ／＼お月様は、すーと雲の中に逃げてしまひました。でもお地藏さんは、やつぱり／＼だまつて、靜かに笑つておりました。

さあ、どの位たつたことでしょう。いえ、何時間たつたことでしょう？ 汗ビツシヨリかいて叩いていた、ボン子のお腹が、突然、大きな音と共にパンクしてしまいました。

さあ、大變です。見る／＼ボン子のお腹はヘナ／＼とベチャンコになつてしまいました。

「あー、あー。どうしよう、どうしよう。と、と、とんでもないことをしてしまつたわ。大事な／＼お腹が、こんなに、ベチャンコになつてしまつて……」

かわいそうにボン子は、しやくりあげました。

一方、河童は、ガン／＼と耳なりがしていたので、目をぎゅつとつむつていたのですが、急にすーとボン子の腹つづみが聞こえなくなつたので、おそろ／＼目をあけて見ますと、これは／＼ボン子のお腹がパンクしているではありませんか。河童の喜びようといったらそれはありませんでした。

「うあー。勝つた／＼。河童様の大勝利だ！どうだ、ボン子嬢、いやさ、狸小町殿！そのお腹はタヌ公のお腹ですか？エヘヘ」

河童はこの喜びを、どうして現わしてよいか、わからなくなりました。そこで、ドスン／＼と宙返りを何回もしたり、變な河童踊りをして、笑いころげておりました。ボン子はしやくりあげながら、うらめしそうに河童をにらんでおりました。

ところが、不思議なことが起りました。今まではしやぎまわつていた河童が、急にベタ／＼と腰を抜かしてしまいました。見る／＼中に顔色が、青くなつてきました。これは一體、どうしたというのでしょうか？

「み、み、みずが無くなつた！お皿の水が！」

成程！これは大變です。何回も宙返りをしている中に、頭のお皿

の水が、すつかりこぼれてしまつたのです。このお皿の水がなくなると、河童は死んでしまいます。

「あー、ひとごとではない。困つたことになつた。み、水がなくなつたら……沼まで歩くことも、這うことも出来ない！ よー。ボン子さん。お願いだ！ 助けてくれ！ どうかしてくれよ！ お、お、俺はもう……」

でもボン子も、ベチャンコになつたお腹をおさえて、眉をしそめてシクシク泣くばかりでした。

「河童、河童さん。こんな姿じゃ、とても家に歸ること出来ないわ。ねえ、河童さん！ このお地藏さんになんとかお願いしてみましようよ。きつと……お地藏さんは……」

「おー。そうだなあ、お地藏さんに」

河童とボン子は、相も變らずだまつて、靜かに……立つている、お地藏さんの前まで通つてゆきました。そして、生れてはじめてウヤ／＼しく二匹そろつて兩手をあわせました。

「お地藏さん。あなたはなんにもいわないけれど、今の出来ごとは全部、ごらんになつていたと思います。こんなだらしのないさまになつてしまひまして。なんとか。おたすけを」

「はい。お地藏さん。今、河童さんが申した通りでございます。どうぞお地藏さんのお力で、私たちをおたすけくださいませ。もう、これからは喧嘩なんか、いたしませんから」

河童とボン子は、涙をボロ／＼流して、心の底から眞剣に、お地藏さんをお願いしました。すると、今まで靜かに笑つていたお地藏

さんが、ちよつとお顔をあげて、申しました。

「これ河童と狸！ お前たちの騒ぎはよく見とどけたぞ。なぜお前たちはくだらぬ意地を張つてゐるのじや。自分の心をやつと靜めてから、それから「お腹を元通りに」「お皿に水を」とさわいでも駄目じや。いつも……お念佛を唱えておれば、こんな馬鹿げたことも起らんですんだものを。まあ、よい……。わしも一緒に唱えてあげよう。よいか、お念佛をお唱え申せ」

「あの一。お地藏さん。お念佛というと、あの一。ナムアミダブツという……」

「それで、お地藏さん。お念佛をお唱えすると、お皿に水がたまりますか？」

「ハハハハ。河童と狸！ 騒る、騒らんはこれからのことじや。只只南無阿彌陀佛とお唱えするのじや」

お地藏さんは、こうおつしやると、又お顔をすこし下におむけになつて、ゆつくり……とお念佛をお唱えになりました。河童もボン子もお行儀よく、二匹そろつて兩手をあわせ、お地藏さんの聲にあわせて、お念佛を唱えるのでありました。

桃の花がお地藏さんの頭の上に、河童やボン子の肩の上に、一ひら、二ひら、ひら／＼と舞いおりてきました。

さつきまで雲の中に入つていた、オボロ／＼のお月様も、又スーとお顔を出して、にぶい光をお地藏さんや河童や狸の上に、投げかけながら、お空の散歩をつづけるのでありました。

信ずることゝろ

竹 中 信 常

すべての根底

私共が、日々の生活を営んでゆくのに、何よりも大切なことは、「信ずる」ということである。信ずるところがなければ、私共は、一日といえども生きてゆくことは出来ない。一日の生活を終り、夜、静かにねむりに入る時、誰が自らの生命の、そのねむりの中に消えさることを、豫期しようか。明日の生命の續くことを信ずればこそ、人は安らかに、眠りに入ることが出来るのである。電車に乗る。人々は平然として、新聞をよんだり、居眠りをしたりしている。然しその電車が何時脱線するか、いつ衝突するかは分らない。乗つている人々は、運轉手の技倆を信じ、脱線轉覆などはめつたに起るものではないということを、信じている。それだからこそ、平氣で談笑したり、讀書したりしていられるのである。商賣をするには、相手が全く信用できなければ、一錢の取引も出来ない。大きくは、國家と國家との間でさえも、そこに國際信義ということが守られていると信ぜられてから始めて、世界秩序が保たれるのである。このよう

に、すべての生活は、信ずることから出發している。

信ずることのない生活を考えてみるなら、それは生活の破滅である。やかましくいえば電車にも乗れぬ。商賣も出来ない。ねむつてゐる間にいつ息が止まるかも知れぬと考えれば、眠ることすら出来なくなつてしまふ。信ずるところのない生活ということは、考えてみることにすら出来ない。

學問の中で、最も精密であるといわれる物理學でさえも、その出發點には、假説というものがある。假説はこれを證明することは出来ない。たゞ信ずるだけである。このような假説に基く論證を信ぜずしては、一步も、學問をすすめることは不可能である。すべてを實證に基ける科學でさえもその根底には、信ずるところがなければならぬ。

信ずる自分

さて、それなら、信ずるということはどういうことであろうか。よく「あのことは信用を置く事が出来る。」という。また「私はこう

信じます」ともいう。この場合、信じたり、信用したりするのは誰なのであるか。それは外ならぬこの自分である。自分が信ずる。自分が相手に信用を置くのである。決して、相手がそうするのではない。自分で納得のゆかぬ場合には、他人からどんなにすすめられても、どうしても信ずることは出来ない。自分が、自分自らの意志で信ずるのでなければ、信ずるころはおこらない。

それならば、自分だけが納得して信ずれば、それでよいだろうか。仲々そういうわけには行かない。殊に、近來のように、不信と裏切り、偽りと策謀がみちあふれている社會では、自分の信じていることが、忽ちに覆えされてしまう。相手を信用して受取つた手形が落ちなかつたり、婚約までした相手が背き去つたりする現實である。何氣なくたべた料理から、恐ろしい傳染病にかかることもあり、ふと飛びのつたバスが、はからずも轉覆して、思わぬ災害を蒙ることも珍しくない。いくら自分が信じてても、世の中はそのようには動いて行かない。蓮如上人は

ねいるにも、心靜めて寢入れかし、

そのまま死する、こともありけり

と歌つておられるが、まことに、佛の高い心からみるならば、ねむりに入る人の姿は、正に死の前に横わるものとも觀ぜられるであらう。私共は、自分勝手の都合できめた立場から、凡ゆることを信じて、平氣で生きているのだが永遠の時からすれば一瞬の生命しか持たぬこの自分、無限の宇宙から見れば一粒の砂にも劣るこの自分、はかなくもいと小さきこの自分にからくもしがみついて、人々は頼

りなく生き惱んでいるのである。高いまなこからみれば、これほど危うく、はかないものはないであらう。

私共が普通、信ずるといつているのは、このように、自分が信ずるのであつてその根源は自分にある。他人を信用するのも、その人が信用するに足る人と信じた自分の心を信ずるに外ならない。生命が續くと信ずるのは、生命が續くと信じている自分を信ずることのである。いわば「自分を信ずる」のである。ところが私共の住む現實の世界は相對の世界である。善と惡、正と邪、右と左と、すべてが相い對立する世界である。それ故、自分を信ずれば他人を欺くことにもなつて来る。そこに、不信と裏切、失意と落膽の渦巻きが生まれて来るのである。

信じきる心

或る人が病氣になつた。色々病氣のことを氣にかけて、醫者にあれこれと容態を聞いたり、自分で熱を計つたり脈をみたりして氣を揉んでいた。それ故、病氣は悪くなる一方であつた。當人はますます病氣のことが氣にかかつて、藥をあれこれと變えてみたりしてついには醫者を變えてみたりするのだが、何としてもよくならぬ。家人も心配して、名醫の誇れある醫師をたのんで來た。その醫師は病人の枕頭に坐るや、まづ「あなたは病人、私は醫者、この區別をよく辨えておいて下さい。病人は醫師を信じて専心これに従えばよい。病人でいながら脈を見たり、熱を計つたり藥を調合したりすることは間違いです。病人は醫者ではありません。あなたは病人

と醫者と二人分の氣を揉んでいるからなおらないのです。自分の病氣はすべて醫者にあずけて下さい」といつた。病人はめき／＼快方に向つたとのことである。自分を捨てて醫者を信ずるのである。信じ切るのである。

法然上人はこのところを深信、即ち深く信ずるところである、といわれた。そしてこのところの内容は二つの氣持ちから成つてゐる。即ちその一つは自分を煩惱具足せる凡夫であると深く信ずるところと、二には念佛を唱えれば必ず佛は救つて下さると固く信ずるところとである。信ずるといふ言葉は同じでも、一般にいう信ずるところは自分を信ずることに外ならぬ。

佛教でいう信ずるところは、かかる自分をふりすてて、凡ゆるものをその中に含み、凡ゆる時を通じて現われて来る永遠無限なる佛を信ずることなのである。一方は病氣であり煩惱具足の自分を信ずる。これに對して眞實の信仰は醫師即ち佛を信ずる。自分を信ずるのではない、佛を信ずるのである。自分にたよるのではない、佛にたよるのである。その相異は正に天地にも比すべきである。

佛を信ずるとは、自分が佛の中にとけ込んでしまふ。自分を投げ出して佛の懷にとび込んでしまふことなのである。親鸞上人は、歎異鈔の中で「たゞ念佛して、彌陀に助けられ参らすべしと、善き人の仰を蒙りて、信ずるより外に、別の子細なきなり。念佛は、まことに淨土に生まるる因にてや侍らん。また、地獄に墮つべき業にて侍らん。總じて以つて、存ぜざるなり」といつてゐる。深く、自己を疑い悩んだ親鸞上人にして、始めて、法然上人のすすめる念

佛を信じ、それによつて、淨土に生まれようと、地獄に墮ちようと構わない。たゞ黙つて、うけ入れる。これが本當の信ずるところなのである。淨土に生まれたいから信ずるのではなく、信ずるから生まれるのである。すべてをまかせ切つてしまふところなのである。このような心は、決して私共自らが起こす心ではなく、より大いなるもの、より高きものによつて與えられたるものである。従つてそれは既に私共通常の人間のころではない。佛の懷に入り、佛と一つになつた心である。寶積經にも説いてゐるように「信は是れ佛子なり」であり、信ずるところは即ちそのまま信のころなのである。

底知れぬ深い疑いと、はて知らぬ遠い迷いと、この二つのころを以つて、自己の心にわだかまる「自分」といふものを、洗つて洗つて洗い流がして、心中無一物となつて、與えられたるものをそのまま素直おにうけ容れる。信ずるところはここに生まれるのである。疑うことも、迷うことも知らぬ人には、到底信ずるところを抱くことは出来ない。

(NHK佛教放送)

告

出版事情の急騰、豫定頁數の増加などから餘儀なく豫定頒價を改訂。
どうか御諒承下さい。

急

新刊淨土トラクト 各冊とも一部七圓(送料六圓)
五十部以上申込は實費頒布の奉仕をいたします。

浄土の會員を

一人でも多く

◇どなたでも會員になれます。

◇會費は半年一三八圓、年額二七六圓です。

◇會員には毎月「浄土」を配布します。

◇この會はみなさまの會ですからその發展のために、お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰運動をひろめませう。お知合の方々にぜひおすすめ下さい。

◇お申込には振替（東京八二二八七番）を御利用下さい。

新會友紹介

東京 塚原麻須美・角谷留次郎
神奈川 森川美代子（成道寺）
山形 佐藤行春
仙臺 金子太郎（中村眞瑞）
福井 清水涼運
山口 岡本清彦・後藤シゲノ
山縣爲吉（周慶寺）
福岡 吉田トヨ
愛媛 風本兼一（阿部靈成）
熊本 坂本 弘（田中弘憲）

本誌を通じて信仰の道とともに歩むことの出来る善縁を感謝して新たに今度、會友となられた方々を御紹介申し上げます。一人が、更に一人をと、心から心へと、浄土の光は傳わり、そして互に浄められてゆくことを、私たちは念願いたします。

御紹介下さいました會友の方々に厚くお禮申し上げます。

（敬稱略、カッコ内は紹介者）

芝園だより

◇氣はれては風新柳の髪をくしけづる、といふのは都良香の詩句である。羅生門の鬼がこの句に、氷消えては波舊者の鬚を洗ふ、と附けたといふ傳説がある。前句には訪れて来る春の温い息吹が流れている。後句には去りゆく冬の姿が些かの鬼氣を漂はせている。

◇来るもの、去るもの、新しきもの、舊きもの、その移ろひの、瞬時もとまらぬ時の流れの中にあつて、しかし私たちは一筋の白道をみつめよう。うらうらとした春の空に、爛々と白く輝く道を仰ぐものにとつて、浄土は現實となる◇歌舞伎座が復活しての初興行には吉田先生の名作二條城の清正が上演されたが、歌舞伎と佛門、その道を説かれた今月の先生の隨想は一しほ心をひかれるでせう。根本會代さんは本誌會友、女性の心から念佛の道を記された好短篇を御紹介します。藤吉慈海氏は京都

でひろく佛教運動を行つて居られます。

◇陽春四月號には、久々に眞野正順先生の御執筆が頂けます。御期待下さい（藤田）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下さい。着次第御送本申し上げます。

「浄土」 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年二月廿五日印刷
昭和廿六年三月一日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所
東京都千代田區神田神保町三ノ下

發行所 法然上人續仰會
東京都港區芝公園五ノ一〇

振替 東京八二二八七番
會費番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

新刊浄土トラクト

春のふ彼岸は信仰を深める好機

現代社會の混迷の中に、信仰を求める人々のために筆者がそれぞれ想を新たに、その道の一步をはつきり示した好著・本文各一六頁別表紙

信仰の導き

佐藤賢順著

一枚起請文

藤井實應著

本宗信仰の精粹、一枚起請文の永遠の生命は、いま身近かに語られた、必讀の書

◆各冊とも定價一部七圓送料六圓(切手代用可)

◆十部以上送料十二圓、十部を増す毎に六圓増、五十部以上三十五圓、百部以上は送料當方負擔

◆教化施本に御活用の方は特價割引の御相談に應じます(五十部以上に限る)

東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

浄土トラクト既刊

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味のある装釘、そして誰もが氣輕に手にできる廉價——浄土トラクトは各方面に好評をもつて迎えられています。

お十夜の話

藤田寛雅著

切

お彼岸の話

竹中信常著

切

お盆とおせがき

佐藤密雄著

四圓送料六圓

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の歩みを進めてゆく上に、また生活文化としての佛教への常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番